

2023年7月9日

年間第14主日

菊地功大司教 メッセージ

マタイ福音には、「重荷を負う者は、誰でもわたしのもとへ来なさい。休ませてあげよう」と言う主イエスの言葉が記されていました。

現代社会にあつて、心の安らぎを見いだすことは容易ではありません。かつて安らぎの場の筆頭とも考えられた伝統的な家庭は広く崩壊し、地域共同体もその役割を果たしていません。その中にあつてわたしたち教会の役割こそは、人と人との出会いのなかにあつて安らぎを生み出すことではないでしょうか。

教会が、訪れる人に重荷を負わせる場ではなく、安らぎを与える場となっているでしょうか。もちろん教会共同体には様々な人が存在して当然ですから、すべての人が仲良くともにいるというのは理想としてはそうですが、現実的ではありません。異なる人が互いに理解することに苦労しながらも、しかしそれでも教会が安らぎを生み出す場となり得るのはどうしてでしょう。それはその安らぎが、ひとり一人の性格に頼っているようなものではなく、教会共同体の真ん中に現存される主イエスご自身からもたらされるからに他なりません。ですからわたしたちは、互いに理解することの難しい異なる存在であるにもかかわらず、安らぎをもたらず主によって一致しているのです。

残念ながら、教会にあつても、安らぎではなくて苦しみを生み出してしまっている事実が存在します。様々なレベルでのハラメントがあつたり、互いの、また時に一方的な無理解に起因する対立があつたりするのは否定できない事実であります。教会に集まっているのは天使のような人ばかりではなく、わたしも含めてすべてが罪の重荷を抱え欠点を抱えた不十分な人間です。

しばしばわたしたちの人的知恵や経験による賢さは、自己中心の世界を生み出し、まるで自分の周りに防御壁を築き上げるようにして、そこに近づいてくる人を傷つけてしまいます。ですから、わたしたちは常に、心に言い聞かせましょう。教会は安らぎを与

える場であり、重荷を与える場ではない。そして教会とは誰かのことではなく、自分こそがその教会である。そのわたしには、真ん中にいる主イエスが生み出される安らぎにまず満たされ、そしてそれを伝える務めがある。

感謝の祭儀の中でご聖体をいただいて主と一致するとき、わたしたちの心には神の霊が宿ります。主とともにあるわたしたちは、主が与えてくださる安らぎを、自らもあかしする道を選びましょう。